
間桐雁夜の、

如月由真

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

間桐雁夜の、

【著者名】

如月由真

N1590N

【あらすじ】

あなたが幸せであればいいと思っていた。それを壊したのは、他でもない俺だけだ。

間桐雁夜性転換もの。T/Sの需要はどういかへ飛んで行きました。いや、多分あるはず。

続かないよ。

禅城葵は、間桐雁夜の憧れだった。

けぶるような睫毛に、白桃のような肌。滑らかな所作に、あたたかな微笑み。そのどれもが雁夜とかけはなれていて、彼女は葵を実の姉のように慕つたのだ。

だからこそ、葵が遠坂に嫁ぐことが決まった時、雁夜は絶望した。清らかな彼女には、魔術に関わりなく生きて欲しいと願つていたからだ。

それでも、葵は幸せそうに遠坂の嫡子に寄り添つていた。遠坂時臣。気障つたらしいあの男。……雁夜の許婚だつた魔術師。

熱した鉄の塊を飲み込む思いで葵を祝福した。しあわせに、葵さん。

マキリは魔術の家系。『水』と『吸收』、そして『蟲』。雁夜の実母と実父を飲み込み、欠片すら遺さず食い散らかしたあの蟲藏。マキリの一族を吸収して続いてきた、『間桐』。それを継ぐのだと瞳つ『父』。怯える兄。

高校を卒業してすぐに出奔した。そのような魔術に身を浸すことなど雁夜には御免だつた。自分の人生は自分のもので、長い一生の中で複数存在する選択肢を選ぶのもまた自分。その考え方が、きっと悪かつたのだ。

「……やくひ、ちゃん」

名を呼べば、彼女はほんやりと雁夜の顔を見上げた。

「かりや、おばさん？」

遠坂葵の末娘。姉の凜とじゅれつくよつに遊び、笑い、甘えた少女。

だが、日だまつのみであった少女は今、眼前でなにも映さぬ虚ろな瞳をしている。色褪せた髪と瞳。

……代を重ねるごとに零落していくマキリの血。ついに、兄である鶴野の息子は魔術回路を持たずに出産まれてきた。後継者田されていた雁夜は間桐を捨てて世界に飛び出した。

その結果、間桐当主たる臓硯は古くからの盟約に縛り、桜を養子に迎えたのだ。

マキリの胎盤として。

「もう寝なくちゃだめだよ、桜ちゃん」

「…………おばさん、どこかいくの？」

「内緒だよ。…………ねやすみ

褪せた髪に手を置き、ゆるりと撫で、別れた。

俺の業だ。雁夜はそう呟つ。

辛くて逃げて、…苦しくてただ、逃げただけ。自分ひとり逃げ出した。その結果、女といつ性別の意味も、処女といつ言葉の意味も、なにも理解できていない桜が蟲に凌辱された。

脳裏に過ぎるのは葵の悲しげな顔。最後に出会った時の、時臣の表情。

「あの、馬鹿が……ッ」

信じていた。お前なら葵さんを幸せにしてくれると、信じていたのだった。

ギリ、と強く歯を噛む。深く息を吸って、前を睨み据えた。背を流れる、色の抜け落ちた髪。一房弄り、自嘲する。

『言葉使いは仕方ないけれど、髪は伸ばしてね。雁夜君にはその方が似合つわ』

あたたかな口差しのような声がよみがえる。

帰さねばならない。桜を、葵のもとへ。凛の側へ。

時臣は信用できない。多分　あいは、桜がこんな日にあつていることを知らないのだろう。

魔術は秘匿されるもの。マキリは『水』と『吸收』とは有名だが、『蟲』は聞かない。遠坂には呪いといつても過言ではない【うつかり癖】というのがある。今回それも作用したのか、マキリの魔術を調査しなかつたのだるつ。時臣は『盟約』という張りぼての約束に信を置きすぎたのだ。

だが。

遠坂時臣という人間は生糸の魔術師だ。

遠坂の悲願は他の魔術師と同じくして、『根源』へ至ること。魔術のためならば身内を切り捨てることができる、人間。

だから彼は、桜に何が行われていようと、それを知つて彼自身がどれ程の後悔に苛まれたとしても。遠坂時臣は、遠坂桜と共に過ごすというコメを捨てるだろう。葵と凛と桜の、ささやかな幸せを踏みにじつたようだ。

葵にこのことを話せば、魔術と関係のない家柄であった彼女は自身ででもこの家に乗り込んで来るだろう。マキリの怪物と相対するだろう。しかし、どう足搔いても勝ち目がない戦いだ。

蟲に犯される葵を幻視して、雁夜は口元を押された。

餉えた臭いが籠る蟲巣の床には、聖杯戦争を勝ち抜くためのサーヴァントを召喚するための陣が敷いてあった。

キイ、と蟲が鳴く。心なしか怯えた色で。散々雁夜の身を翻つた存在はひどくか弱い蟲で、しかしその苦痛から逃れることはできなかつた。

皮膚の下で、蟲が「じめぐ」。

「……狂戦士」

臓硯はバーサーカーを指名した。魔力消費が激しいサー・ヴァントは、既に余命幾許もない雁夜の命をどれ程吸い上げるのだろう。

「……どうでもいい、か」

戦争中だけ持てばいい。

聖杯に手が届けばいい。

桜を救うことが出来れば、それでいい。

桜の処女を散らせ、心を壊した責はこの身で贖おつ。責務を放り出して逃げ出したのは雁夜なのだから。

「誓いを此処に。私は常世総ての善と成る者、私は常世総ての悪を敷ぐ者」

間桐雁夜。

18で間桐を出奔し、マキリの業から背を向け固く口を閉じていた彼女は。

「汝三大の言靈を纏つ七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ！……」

今よづやく、前へ進み出した。

(後書き)

女に産まれていて、葵に対する感情は家族愛じみたもので打ち止め。

そのためか、時田の桜に対する判断はまだ客観的に見れている。ただボコる気は満々。

時田馬鹿野郎娘養子に出すんなら相手のことよく調べとけナメエエエーとは思っているけれど、根本が自分が間桐を逃げ出したことにあるとしかやんと理解している。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1590z/>

間桐雁夜の、

2011年12月5日18時57分発行